

半導体漫遊記

湯之上隆

17

2009年8月、光が最後と想って訪ねた文社のペーパーバックシリーズから、『日本「半導体」敗戦』を出しようと言われ執筆した。このペーパーバックシリーズは、光文社の元編集長・山田とである。

順氏が創刊した。横書き、紙なし、再生紙使用、一冊約1000円。日本の書籍としては珍しい形態である。ベストセラーとして、城繁幸著『内側から見た富士通「成果主義」の崩壊』（2004）がある。

実は筆者は、企画書を持って出版社を半年ほど回ったが、そのすべてから「半導体と名の付く本は売れない」と断られ続けた。これ

思ったら、「さっき、編集会議があって、ペーパーバックシリーズ、廃刊になることが決まったよ」と言うではないか！

『日本「半導体」敗戦』、紙で5万部販売

電子書籍不振、5部のみ

編集会議があって、ペーパーバックシリーズになった。その際、山田氏は、『大阪破産』、138冊目に筆者の『日本「半導体」敗戦』を選んだ。「破産」して「敗戦」で終わり、としゃれたのである。以上書いてしまったかし、危機一髪の綱渡

よ。何としても出版していただきたい！」。うして、いつもこうなるのだろう。さて、ペーパーバックが廃刊になり、編集の座を追われた山田氏はその後どうしたか。光文社は業績悪化により、早期退職者を募った。山田氏はそれ

よ。何としても出版していただきたい！」。うして、いつもこうなるのだろう。さて、ペーパーバックが廃刊になり、編集の座を追われた山田氏はその後どうしたか。光文社は業績悪化により、早期退職者を募った。山田氏はそれ

山田氏が編集した最後のペーパーバック、『日本「半導体」敗戦』



年と言われた。日本の家電メーカーからも様々なタブレット端末が発売され、電子書籍ブームが起きた。山田氏をはじめ（株）メディアアプレットの仲間も（筆者も）一獲千金を夢見たのである。ところが、電子書籍は全然売れないのである。例えば、拙著は紙では5万部売れた。ところが、電子書籍ではたったの5部なのだ。（株）メディアアプレットでは、数十冊の電子書籍を出版したが、どれも似たような状態である。私は電子書籍での一獲千金は諦めた。山田氏は、その顛末を『出版大崩壊 電子書籍の罠』（文春新書）として出版するに至った。

出版業界の売り上げは、1997年の2.7兆円をピークに激減感に満ちていた。2010年は、電子書籍元年（科学者）